

第12回

監修・執筆 大月康弘

西ヨーロッパ世界の成立

今回学ぶこと

476年に西ローマ帝国が滅亡すると、中世の西ヨーロッパ世界ではフランク王国が政治の中心となって（8世紀）、現在のドイツやフランス、イタリアの基礎がつくられた。他方、宗教の面ではローマ教皇を中心として、キリスト教の信仰が、人びとのよりどころとなった。11世紀、このフランク王国の王と、ローマ教皇との間で権力闘争がおこる。叙任権闘争である。その中で、「カノッサの屈辱」と呼ばれる事件が起き、西ヨーロッパ世界を大きく動かすことになる。

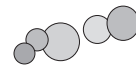
調べておこう・覚えておこう

- フランク王国の領土を歴史地図で確認してみよう。
- フランク王カールの宮殿があったのは、ドイツのアーヘンという町だった。この町とイタリアのローマとのおよその距離を調べてみよう。
- 叙任権闘争が起こった11世紀のヨーロッパで起こった事件を調べてみよう。

西ローマ帝国の滅亡

476年に西ローマ帝国が滅亡した。西ヨーロッパの中世世界では、フランク、西ゴート、東ゴート、ブルグント、ヴァンダルといったゲルマン人の諸王国が成立した。6世紀、ビザンツ皇帝ユスティニアヌスが、イタリア半島を再征服して、古代ローマ帝国の版図を一時回復した。しかし、その後イタリアにランゴバルド王国が成立するなど、政治的混乱は続いた。

7世紀になると、フランク王国が勢力を伸ばし、政治の中心となって、現在のドイツ、フランス、イタリアのもととなった。8世紀後半、ローマ教皇は、フランク王カールと連携して、彼を皇帝とした（800年12月25日）。これによって、西ヨーロッパ世界は、ローマ教皇とフランク王の政治連携のもとに展開するようになった。



フランク王国の西ヨーロッパ統一

西ヨーロッパ世界では、キリスト教の信仰が共通の文化だった。ローマ教会がその中心にあった。ローマ司教（教皇）は、コンスタンティノープル教会と連携して信仰内容を管理、西ヨーロッパ内の諸教会を束ねていた。7～8世紀、ローマ教皇は、ランゴバルド族の攻撃に耐えかねてフランク王に支援を要請、フランク王がイタリア遠征して、ここにフランク王とローマ教皇の連携が成立した。フランク王カールの皇帝戴冠（800年）は、その総決算だった。

皇帝と教皇による叙任権闘争

10世紀、ローマ教皇は、イタリアの政治に翻弄されて墮落していた。他方、王や貴族は、独自に聖職者を任命（叙任）して、教会を私物化していた。この叙任は、教会の財産を手に入れる、つまり富を得る手段でもあった。11世紀になると、改革派教皇が出現した。ローマ教皇グレゴリウス7世（在位1073～85年）が、神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世（在位1056～1105年）と争って、叙任権闘争を展開した。グレゴリウスはハインリヒを「破門」し、対立が極まった（1077年）。「破門」は、臣下の離反を引き起こし、ハインリヒは、北イタリアのカノッサにいたグレゴリウス7世に、許しを請うた。これが「カノッサの屈辱」という事件である。これによって、ローマ教皇の政治的優位が高まり、西ヨーロッパ世界は「神権政治」体制となった。